

情緒障害に関する研究

小沢久美子

問 題

情緒障害の概念の不明確さは多くの研究者により指摘されているところであるが、本研究では情緒発達における障害という基本的な観点から情緒障害を考えていく。ここでは情緒を、外的な刺激や刺激事態、個人の要求や欲求不満、葛藤、不安等から生じた緊張状態と規定する。この緊張は表出されることにより解消されるため、情緒の障害は緊張の解消過程の障害、すなわち表出の過程での障害と考えられる。情緒の表出様式は年令発達に伴い、未分化な全体的反応は部分的な特殊な反応に、無統制な表出は統制された表出へと変化していく。無統制な情緒表出も統制過剰な情緒表出もともに情緒発達を阻害するため、年令段階に相応した適切な統制をすることが情緒発達にとり重要になってくる。情緒の統制は学習されるものであるため、養育者の判断の適切性、一貫性が重要であると同時に、両者の情緒的つながり—子どもに安定感として体験される—が重要な意味をもって来る。安定感がある場合は情緒発達に障害をきたすことなく適切に統制することが可能になる。乳幼児期には母親の愛情のこもった養護が、幼児期には母親が子どもを受容し、子ども自身を、子どもの成長を信頼することが安定感をもたらすと考えられる。

ここでは情緒障害を正常な情緒の発達過程からの逸脱と考えている。しかし、知的遅滞や器質的障害が原因で正常な情緒の発達過程から逸脱しているものは、情緒障害に含めない。そこで正常な情緒の発達過程を知る必要が生じてくる。子どもの情緒反応はそのまま行動化されるため、表出された行動から情緒の状態を知ることが可能である。子どもの発達過程を全依存的な存在が社会化される過程であると考え、幼児期においては母親への依存行動の減少、家庭以外の場面への生活環境の拡大、同年令集団への参加、情緒表出の統制、欲求の統制が大きな課題である。したがって、母親との関係（依存性）他の子どもや大人との関係（社会性）、欲求を統制する場面での行動（自己統制）をとらえることにより、情緒の発達程度を、また、情緒に障害が生じているか否かを判断できると考えられる。

目 的

乳幼児期は人間の発達過程の中でも最も変化の激しい時期であり、様々の障害を生じやすい。また、情緒障害児の多くがこの時期に障害の萌芽を見せていることか

らも、障害の早期発見、早期治療が望まれる。本研究では、情緒発達度を測り、正常な発達過程から逸脱している情緒に障害を生じている子ども、また、障害を生じる危険性のある子どもを発見するテストの作製を行なう。対象は3才から6才である。本テストは先に述べた問題に従い、依存性、社会性、自己統制を表わすと思われる項目、情緒発達過程に重要な意味を有している安定感、情緒に障害が生じていることから示される習癖や特徴的な行動を表わす項目から構成される。依存性は人との関係において、自己の満足と安定を求めるとともに他人に向ける行動であり、具体的には身体接触、近接、注意、助力、保証を求めるといった諸行動で表わされる。社会性は家庭以外の場所への生活場面の拡大、家族以外のものへの対人関係の拡大に対する能力であり、具体的には同年令集団における行動等からとらえる。自己統制は自己の欲求を統制し、行動を統制していく能力であり、自己の判断で欲求を統制する場面や他から統制を要求された場面での行動からとらえる。安定感とは子どもが養育者との関係においてもつ、保護されている、好まれている、受け入れられている、信頼されているという実感である。安定感がある場合は統制過剰に陥ることはなく、自己の内にあるものを十分に表現することができると考えられるため、自己の意志を表示できる場面での行動等からとらえていく。テスト作製後、得られた結果から発達過程を検討し、正常、異常の基準を明確にすること、テストの信頼性、妥当性の検討、安定感の情緒発達過程に及ぼす影響について検討を行なう。

第一次調査

目的 項目の選択および検討を目的とする。

方法および手続

- (1) 項目の収集および質問紙の作製—幼児児童性格診断検査等を参考とし問題および目的で述べた概念を表わすと思われる項目を収集し、検討を終て82項目からなる質問紙を作製した。各項目とも「非常によくある」「よくある」「ときどきある」「たまにある」「全くない」の5段階評定とした。
- (2) 調査の実施—調査対象は幼稚園の園児281名および吉原林間学園で収容治療を受けている児童16名である。記入者は原則として母親とした。吉原林間学園の対象に対しては、幼稚園、保育園当時の様子について評定するようインストラクションを与えた。

結果—各項目の応答の度数分布、全項目間の偏差積率相関係数の算出および完全セントロイド法による因子分析を行ない以下の基準に基づいて項目の選択を行なった。

- 1) 他の項目との相関が、500以上あり、その意味内容が類似していると思われるもの
- 2) 無応答数の多いもの
- 3) 因子分析の結果、第3因子などのすべての因子に対する負荷量が少く、共通性も低いもの
- 4) 反応分布が各年令ともにひとつの段階に、80%以上とかたよりのあるもの

以上の基準と、T幼稚園の園児の中から、調査者および担任によって選択された何らかの情緒的問題を有しているものの結果や吉原林間学園での調査結果を参考として、名古屋大学に臨床心理学を専攻している大学院生4名に項目の適切性の判断を依頼した。その結果、不適切であると思われる23項目を除外した。

第二次調査

目的 テストを構成する項目の決定。

方法および手続

- (1) 質問紙の作製—第一次調査の結果から選択された59項目に新たに1項目を付け加えた60項とした。各項目の評定は「非常によくある」「よくある」「ときどきある」「たまにある」「ない」の5段階評定とした。
- (2) 調査の実施—調査対象は3才児健診に訪れた3才児202名、幼稚園児734名、および障害群として、愛知県名古屋市の各児童相談所に情緒的な問題で相談に訪れたもの19名、3才児健診で精密検査が必要に判断されたもの13名、第一次調査の対象であったT幼稚園児のうち、情緒的な問題を有しているもの34名、計66名である。調査手続は第一次調査と同様である。

結果 完全セントロイド法による因子分析を行なった後、ヴァリマックス法による回転を行ない、その結果に基づいてグループセントロイド法による処理を2度行なった。その結果、不適切と判断された9項目が除外され、各項目は依存性、社会性、自己統制、安定感、習癖等の問題行動、活動性に分類された。また、50項目^{*}について3才から6才までの被験者全体（以後便宜上正常群とする）と障害群との平均値の差の検定を行なった結果、44項目に10%水準以下で有意差がみられた。6項目には有意な差はみられなかったが、臨床的にみて重要であると判断されたため、この50項目をもって決定項目と

* 3才児には幼稚園の登園に関する項目が該当しないため、後の整理にあたってはこの項目を除外した50項目について行なった。

する。また、各項目の分散が異っているため、T変換を行なった。

結果および考察

各カテゴリーの合成得点の平均値および度数分布、また、各項目の5つの評定段階に対する度数分布から、年令発達による変化および該当年令での正常、異常の判断のひとつの基準を得ることができたと思われる。

各カテゴリーの合成得点の年令別の平均値を table 1 に示す。依存性、自己統制、問題行動は年令発達に伴い規則的に値は減少しており、しだいに依存性は低く、自己統制ができる方向へと変化している。社会性、活動性では4才以降、年令発達に伴い値は減少しているが、3才は他の年令に比較して低い値を示している。3才児は問題を有していても顕在化されないことが多く、4才以降生活範囲等の拡大にともない問題が顕在化されやすいこと、および、養育者の評価の要因等が考えられるが、縦断的研究を行なうこと、サンプリングに際し就園しているという同一条件のものを選択すること等により検討される必要がある。安定感は年令による変化が比較的少ないと考えられたが、3才5才間で増加がみられた。項目が調査者の意図通りに被調査者に受け取られているか否か等の検討がなされねばならない。

正常群と障害群の合成得点の平均値を table 2 に示す。障害群は全カテゴリーにおいて正常群に比較して1%水準で有意に大きな値を示している。合成得点の度数分布をみると、正常群では平均から-1標準偏差の段階への分布が最も多く、障害群では+1標準偏差の段階への分布が最も多く、さらに得点の高い段階への分布が多くなっている。

カテゴリー間の相関についてみると、正常群では問題行動、活動性は他の全てのカテゴリーとの間に有意な相関があるが、障害群では問題行動と依存性、自己統制、活動性と安定感間に有意な相関があるのみである。また、依存性と社会性の相関は年令発達に伴い低くなり、依存性と自己統制、社会性と安定感の相関はしだいに高くなっている。また、安定感の高い群と低い群を比較したところ、安定感の低い群は全カテゴリーにおいて高い値を示している。折半法により信頼性を検討した結果信頼性係数は0.932であり、本テストの信頼性は高いと考えられる。また、テスト結果から標準から逸脱していると思われる47名を選択したところ、うち42名に集団行動がとれない、緘黙傾向等の保育場面での問題がみられた。この結果から本テストより情緒発達過程に障害を生じているものをある程度選択できると考えられるが、今後、事例研究、縦断的研究を行なうことにより判定基準を明確にしていかなければならない。

昭和45年度修士論文概要

table 1 カテゴリー別合成得点平均

| 年齢 | 依存性 | | 社会性 | | 自己統制 | | 安定感 | | 問題行動 | | 活動性 | |
|----|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|
| | 平均 | 分散 | 平均 | 分散 | 平均 | 分散 | 平均 | 分散 | 平均 | 分散 | 平均 | 分散 |
| 3才 | 2.38 | 6.42 | -0.14 | 5.40 | 1.10 | 4.78 | -0.68 | 3.61 | 0.89 | 4.52 | -1.15 | 3.77 |
| 4才 | 1.11 | 6.10 | 1.18 | 6.13 | 1.03 | 5.80 | 0.25 | 3.81 | 0.66 | 4.50 | 1.52 | 4.68 |
| 5才 | -1.00 | 5.40 | -0.48 | 4.92 | -0.37 | 4.95 | 0.66 | 4.99 | -0.43 | 4.05 | 0.35 | 4.22 |
| 6才 | -2.56 | 4.24 | -0.54 | 4.68 | -1.80 | 4.30 | -0.20 | 3.51 | -1.15 | 3.79 | -0.66 | 3.66 |

table 2 正常群—障害群の合成得点平均の比較

| | 正常群全体 | | 障害群 | | 有意水準 | | 正常群全体 | | 障害群 | | 有意水準 |
|------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|
| | 平均 | 分散 | 平均 | 分散 | | | 平均 | 分散 | 平均 | 分散 | |
| 依存性 | 0 | 5.97 | 4.56 | 7.74 | *** | 安定感 | 0 | 4.05 | 2.86 | 5.14 | *** |
| 社会性 | 0 | 5.35 | 5.24 | 8.65 | *** | 問題行動 | 0 | 4.34 | 3.33 | 6.22 | *** |
| 自己統制 | 0 | 5.02 | 3.81 | 5.82 | *** | 活動性 | 0 | 4.13 | 2.94 | 4.60 | *** |

****... P ≤ .01